

Norvin Richards: *Contiguity Theory*

Cambridge, Massachusetts: MIT Press, 2016. vi + 381pp

近藤亮一

1. はじめに

本書は、統語構造と韻律構造は相互に関係しているという仮定の下、言語に見られる顕在的移動の有無に関する違いを原理的に説明しようと試みている。統語構造における顕在的移動は音韻・形態的要求により引き起こされると主張することで、ある言語におけるある顕在的移動の有無は、その言語が持つ音韻・形態的特徴を反映していると考えられている。本書では、このような理論を Contiguity Theory と呼び、主に *wh* 移動、TP 指定部への A 移動、主要部移動を取り扱っている。従来、韻律構造のような音韻的な情報は統語構造が完成した後に構築されると仮定されてきたが、本書では韻律構造の構築は統語構造の構築と同時にされると仮定されている。

本書は以下のように構成されている。2章ではある言語における EPP 効果の有無は時制形態素の音韻・形態的特徴により説明されると論じられている。3章では *wh* 句は CP 主要部と同じ音韻句に支配され、その中において韻律的に活性である端に隣接していなければならないという提案がなされている。この分析は4章では Agree 関係に、5章では選択関係に適用されている。6章と7章では主要部移動が関わる様々な現象について論じられている。

紙面の都合上、以下では本書の主要な提案の一部を概観する。

2. EPP 効果

EPP 効果の有無に関する違いを説明するために、本書では時制形態素に関する (1) のような条件が提案されている。

(1) *T-Support (version 2)*

If T is an affix, there must be a metrical boundary in the direction in which it attaches. (Richards (2016: 15))

ここでは、時制形態素が接尾辞である英語とスペイン語の対比に焦点を当てる。

(2) に示されるように、英語では強勢の決定に関わる韻律領域は動詞の語幹とそれに付加した時制形態素から構成されている。

(2) a. o(mitt-ed)

b. con(strict-ed) (op. cit.: 14)

一方、(3) に示されるように、スペイン語では、通常、動詞の時制形態素は強勢が置かれる形態素の直後に置かれる。Oltra-Massuet and Arregi (2005) などは、この事実を説明するために、時制形態素は関連する韻律境界の直後になければならないと仮定している。

(3) cantá -ba -is [Spanish]

sing IMP.IND 2PL

‘you (pl.) sang (imperfect indicative)’ (op. cit.: 12)

(2) と (3) から、スペイン語と英語の違いは、時制形態素が動詞の内部において関連する韻律境界に後続しているか否かということになる。したがって、スペイン語の T は動詞の内部において韻律境界に後続しているが、英語の T は動詞の内部では韻律境界に後続していないため、韻律構造を伴う要素が TP 指定部を占めることで、T が韻律境界に後続している構造型を構築する必要がある。結果として、英語では EPP 効果が見られ、スペイン語では見られないという事実が説明される。

最終的には、(1) の条件は接辞を包括的に扱う条件に修正されている。

3. *Wh*移動

本書では、ある言語における *wh*移動の有無は、その言語における CP 主要部の位置と最大投射の韻律的に活性である端に関係していると主張されている。

本書では、すべての最大投射は音韻句 ϕ に対応するという仮定の下、関連する条件は (4) のように定義されている。

(4) *Contiguity*

Given a *wh*-phrase *a* and a complementizer C where *a* takes scope, *a* and C must be dominated by a single ϕ , within which *a* is *Contiguity-prominent*.

(op. cit.: 84)

(4) における *a* が *Contiguity-prominent* である状況は (5) のように定義されている。

(5) *a* is *Contiguity-prominent* within ϕ if *a* is adjacent to ϕ 's prosodically active edge. (op. cit.: 85)

(4) の条件を満たす方法として (6) と (7) の操作が提案されている。

(6) *Grouping (version 2 of 3)*

Given a *wh*-phrase *a* and a C with which *a* is in a probe-goal relation, create a ϕ that dominates C and *a*. (op. cit.: 85)

(7) *Contiguity-adjunction*

Take a pair of adjacent prosodic nodes and make one of them a daughter of the other. (op. cit.: 108)

本節では、CP 主要部が末尾に位置しているグルジア語の *wh*疑問文において、

(6) と (7) の操作がどのように機能するかを概観する。グルジア語では、(8) の対比に示されているように、*wh*句が動詞の直前に位置しなければならない。

(8) a. nino **sad** Cavida? [Georgian]

Nino **where** 3.go

‘Where did Nina go?’

b. ***sad** nino Cavida?

where Nino 3.go (op. cit.: 101)

(8a) は (9) のような基本構造を持ち、C が導入される前の段階では (10) の

ような韻律構造が構築されると仮定しよう。(10)における丸括弧は、グルジア語は ϕ の右端が韻律的に活性であるということを表示している。

(9) [CP [TP [DP nino] [T' [r [VP [AdvP sad] [V Cavida]] r]] T]] C] (cf. op. cit.: 105)

(10) [ϕ_1 [ϕ_2 DP nino]] [ϕ_3 [ϕ_4 AdvP sad]] V Cavida]] (cf. op. cit.: 105)

本書では、Cが導入された時点で(6)の操作が適用され、(11)の韻律構造が構築されると仮定されている。

(11) a. [ϕ_2 DP nino]

b. [ϕ_a [ϕ_3 [ϕ_4 AdvP sad]] V Cavida] C] (cf. op. cit.: 106)

(11a, b)の韻律構造は最終的に一つの韻律構造にまとめられ、動詞がCに移動すると、(12)のような韻律構造が構築される。

(12) [ϕ_1 [ϕ_2 [ϕ_3 DP nino]] [ϕ_4 AdvP sad]]] V-T-C Cavida] (cf. op. cit.: 107)

結果的に構築された韻律構造において、*mb*句はCと共に ϕ_1 により支配されているが、韻律的に活性である右端に隣接していない。したがって、(12)の韻律構造に(7)の操作を適用し、(13)のような韻律構造を構築する必要がある。

(13) [ϕ_2 [ϕ_3 DP nino]] [ϕ_4 AdvP sad [V-T-C Cavida]]] (cf. op. cit.: 107)

(13)では、(7)の操作により動詞を伴うCが*mb*句により投射された ϕ_4 に組み込まれている。本書では、 ϕ_4 は*mb*句自体により投射された音韻句であるため、その中において*mb*句は韻律的に活性である端に隣接していると見なされる。結果として、*mb*句はCと共に ϕ_4 により支配され、その中で韻律的に活性である右端に隣接しているため、グルジア語の*mb*句は元位置に留まることができるという事実が説明される。これに対し、(7)の操作は2つの要素が隣接している場合のみ適用されるため、*mb*句と動詞を伴うCが隣接していない(8b)が非文法的である事実が正しく説明される。

4. 評価と展望

本書は、顕在的移動は音韻・形態的要求により駆動されると分析することで、記述的な素性を用いることなく言語における顕在的移動の有無に原理的説明を与えようとしている。2章で提案されたEPP効果に対する分析は、多数の言語

の性質を説明することができるという点で、経験的に支持されるだろう。また、3章で提案された *mb* 移動に対する分析は、Agree 関係や選択関係に一般化されており、さらなる構造関係への拡張が期待できる。

しかし、本書の分析にはいくつか不明な点が残されている。例えば、本書では統語構造と韻律構造は並行的に構築されると仮定されているが、派生においてこれらの構造がどのように関係づけられるのかが明らかではないように思う。また、本書では、ある言語においてある顕在的移動が生じる場合と生じない場合があるということについてはほとんど言及がないように思う。例えば、4章では、(4) の条件は Agree 関係にある要素にも適用されるように修正されているが、主語が動詞に後続している英語の *there* 構文や場所句倒置構文では、関連する条件がどのように満たされるかは明らかではないように思う。

このような問題はあるが、本書は統語論と音韻論の相互作用に関する理論的可能性を示唆し、顕在的移動に関わる様々な現象や構文の研究に大きな発展をもたらすだろう。

参考文献

- Oltra-Massuet, Isabel, and Karlos Arregi. 2005. Stress-by-structure in Spanish. *Linguistic Inquiry* 36: 43–84.